

5 . ハードカバー製本への挑戦

昭和 35 年 卒研究生 坪井 孝光

今まで発行してきた会報が 10 号以上に達した頃、今井先生の提案もあって、適度な厚さとなる「何号分かの会報」の合本を作って、会員の希望者と何箇所かへの寄贈をしようという話が持ち上がった。

初めは丁度区切りがいい 10 号までを第一巻としようとの案がでていたが、昨年の第 12 号からは年一回の発行に変わったため第二巻の発行を 20 号とすると、これから 8 年も先のことになってしまう。これでは現実味に乏しいとの考えから、第一巻を 7 号まで、第二巻を 14 号まで、との区切りに変更した。これならば第二巻は先に見える 2010 年の発行となる。

1) 糸 綴 じ

ソフトカバーの製本を先生にお見せしたところ、きちんとした製本の「ハードカバー」が良いのではないかと、との提案で再度見本を作ることにした。

インターネットで「製本」を検索したところ「手造り製本ブックリスト」という項目があり、ここにはかなり詳しく掲載されていることがわかった。

それを参考に試作を開始したが、多くの問題に遭遇した。まず、テキスト通りの工具と治具は無いのでそれに近いものを工夫することであった。

印刷物の端面を揃えて動かないように押さえておくのは圧縮合板二枚とプライヤーで代用し、写真 - 1 のように使った。

テキストでは綴じ代に 2 ~ 3 0 個の綴じ糸の穴を開けることになっているが、穴をあけるのは素人には無理と判断し、その代わりに鉄ノコで写真 - 2 のように溝を 1 cm 置きに刻み込んだ。

この溝が浅いまま、10 冊を完成してみたものの、出来上がった本を開いたところ、綴じ代がバラけてしまい作り直しとなった。今では溝の深さを 3 mm にし、これなら完璧だと思ったところ、最初と最後のページを開いたところ、綴じ糸が抜けてしまい再度のやり直しとなった。

最終的には、溝に埋め込んだタコ糸の両端を 3 mm 程残して切断し、接着剤のボンドが固まらないうちに撚りのあるタコ糸をバラケさせ、写真 - 2 のように広げて接着させた（端面溝の上面が汚れたように薄く見えている部分）、丁度ハト目の役割をさせたことになり、綴じ代がバラけることはなくなった。そのようにして綴じ代部が完成した。



写真 - 1
端面を揃えるための固定

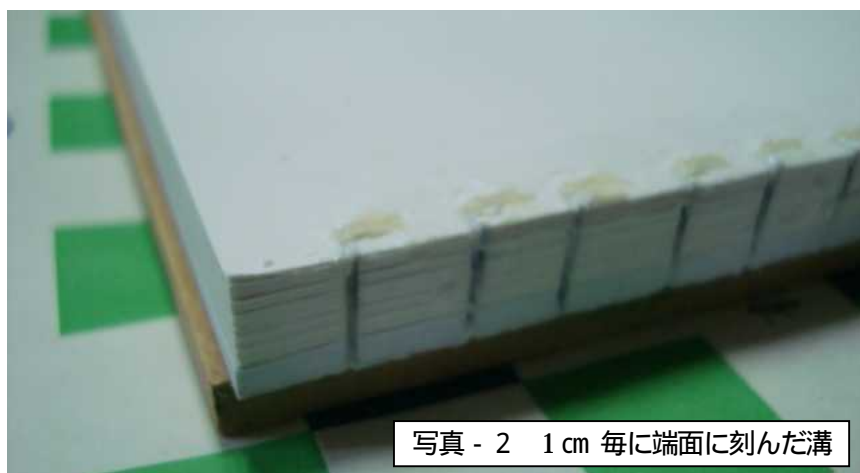
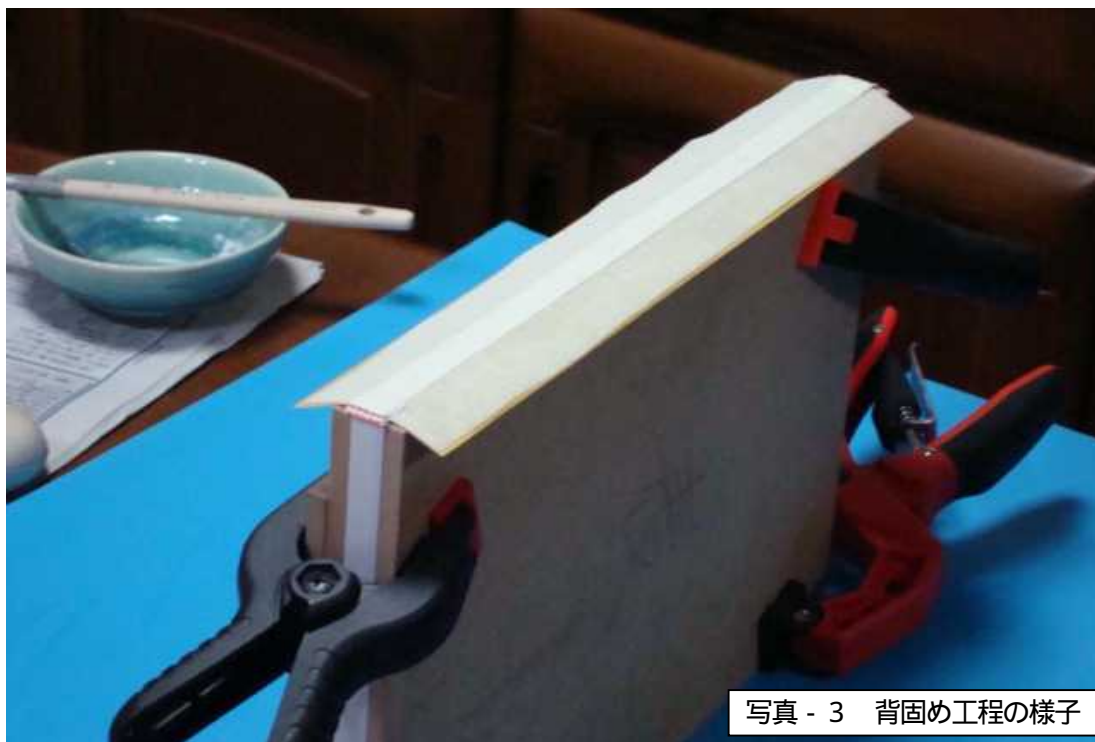


写真 - 2 1 cm 毎に端面に刻んだ溝

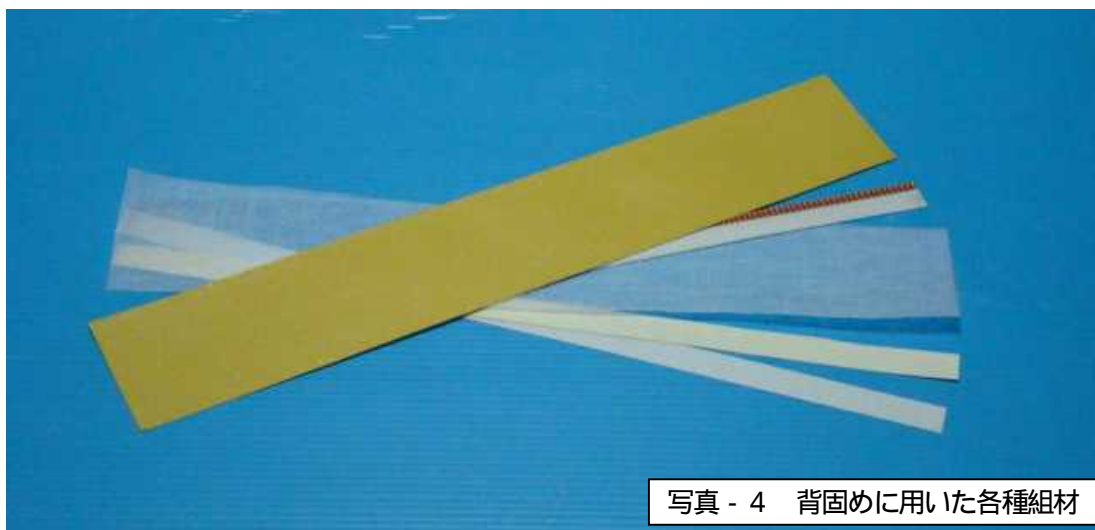
2) 背固め

背固めは表紙と本文とをつなぐための工程であり、ここには和紙、厚口のケント紙、寒冷紗、花ざれ、クラフト紙、の順番に貼り合わされる。写真 3、写真 4 参照。



特に寒冷紗は、表紙と本体とを保持する役目のため、丈夫な化繊のメッシュとなっている。

写真 - 3 背固め工程の様子



上から
・クラフト紙
・花ざれ
・寒冷紗
・ケント紙
・和紙

写真 - 4 背固めに用いた各種組材

3) 見返し貼り

見返し紙はA3を二つ折にして、写真 5 のように補強用の寒冷紗とあらかじめ貼り合わせておく。

これに、前もって作っておいた表紙と貼り合わせることになる。

表紙はボール紙に「アイロン貼りふすま紙」を使用した。



写真 - 5 見返し貼り

4) 表紙貼り / ミゾ付け / 文字貼り

表紙に寒冷紗の部分と見返し紙を張り付けて、貼り合わせは終了となる。



写真 - 6 ステンレス棒を上下に挿み込んで“ミゾつけ”を行う

表紙を開き易くするために、3mmのステンレス棒を写真-6のように挿み込んでミゾをつける。この作業は、見返し紙を張り付けたときのボンドが乾ききらないうちに行う。



写真 - 7 「花ぎれ」は、ハードカバー製本での「飾り」として必須

「花ぎれ」は、写真-7のように上下に二箇所取り付けられる。飾りとして使われる「花ぎれ」の必要な長さは、1cm程度であるが、製本コーナーの売り場で買ってきたのは20cm くらいの長さがあり、それを裁断して貼り付けた。

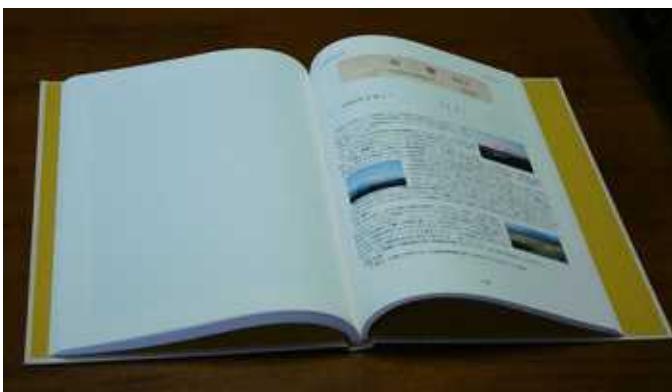


写真 - 8 開いてみたハードカバー製本「会報：第一巻」



写真 - 9 同じ工程で完成した10冊のハードカバー製本「会報：第一巻」

「会報：第一巻」はこのようにして10冊完成した。
写真 - 8、写真 - 9 参照

5) 寄贈

2009.03.02、一冊目の「会報：第一巻」は、NTT武蔵野研究開発センター内の「OBサロン」に寄贈した。当日居合わせた山本(旧姓高橋)さんに今井先生より手渡され、書棚に並べられた。

写真 - 10 参照



見返しのページに「謹呈」と記し、謹呈者の名前も記入しておいた。

写真 - 11 参照



二冊目も同日、2009.03.02 にNTTの「図書館特別資料室」受付にて栗原さんへ、今井先生より手渡され、寄贈された。写真 - 12 参照



三冊目も 2009.03.02 NTTの「資料館資料室」の関係者に手渡され、寄贈した。

四冊目は、今井先生の手によって、「国会図書館」へ郵送し、寄贈いたしました。

以上

追記

1). 『会報：第一巻』のハードカバー製本過程が、簡潔に要領よく上では述べられている。

実際には、完成に至ったかに見えた製本作業も、最終段階において再三にわたって改良の手が加えられ、いわば振り出しに戻っての作業が繰り返し行われた。

これらの改良点の発想・実行は見事である、としか言いようが無い。こうした数々の発想に基づく実に根気の要る努力の積み重ねが、とても手製とは思えぬ立派な『会報：第一巻』を生み出した。

このことを敢えてここに強調し、編集幹事でもある製本者・坪井孝光さんに深謝の意を表したい。

出来上がった「第一巻」の表紙ならびに背表紙の文字が何となく読み取れる程度に、ここでは少し拡大した写真を示しておいた。



2). 『会報：第一巻』を「国会図書館」に寄贈したが、これに対し礼状が届いた。

そのコピーの主要部分をここに再掲しておく。文中に別紙とあるが、これは書名と冊数(1冊)の記載だけなので、ここでは省いた。

我々の『会報：第一巻』の存在は公に残され、希望者は閲覧できる記録として後世に伝えられるものとなった。

2009.9月末(今井 記)

